

ムーンと呼んだ弟

北海道教育大学附属旭川中学校 三年 佐竹 紗

私は、子どもの泣き声が嫌いだ。

耳にした瞬間、胸の奥で閉じていた扉が音を立てて開き、あの日々が流れ込んでくる。苛立ちと寂しさ、そして別れの記憶。そのすべてが、泣き声一つでよみがえる。私が五歳の頃、両親は養育里親となつた。理由を問うには幼すぎた。ただ、ある日突然赤ん坊が家にいて、数日したらいつの間にかいなくなる。そんな不思議な暮らしが、私にとつての「普通」になつていつた。

小学四年生の夏の日。学校から帰ると、駐車場に母の車が止まっていた。妹を迎えたのかと思いきや、母は声を急がせて言つた。
「今日から赤ちゃんを預かることになつたから！」

その日から、私には弟が出来た。

友人に「本当の弟？」と聞かれるたびに事情を説明していたが、やがて面倒になり、「そりなんだよね」と軽く笑つて答えるようになつた。おそらくその頃には、私自身も彼を本当の弟と疑わなくなつていたのだろう。直線のスピーチで彼の話をしたこともある。

彼は、月が好きだつた。夜空に白い光を見つけるたび、「ムーンだ！」と叫び、勝ち誇ったように笑つた。その笑顔は月明かりのように静かに家族を照らしていた。

私に弟ができて五年近い月日が流れた頃、両親は告げた。「本当の家に帰ることになつた」と。私は「よかつたね」と答えた。言葉は軽かったが、胸の奥で何かがひそかに崩れるのを感じた。彼もまた分かっていたのだろう。ここしばらく、些細なことで泣き叫び、取り乱すことが多かつた。私はその泣き声に苛立ちを覚えた。けれど今思えば、彼の混乱の響きに、自分自身の寂しさが重なつていただけなのかもしれない。

別れの前夜、家族で外に出て月を探した。しかし空は雲に覆われ、光はどこにもなかつた。「ムーン、今日はないの？」と彼が尋ねた。私は「雲に隠れているだけ。明日になればきっと見えるよ」と答えた。彼は「そつかあ」と、笑つてうなずいた。その声の余韻だけが、夜の空気に溶けていった。

最後の日は、動物園に行き、帰宅後は彼と共にゲームに没頭した。彼がお気に入りのゲームの最難関クエストをギリギリまで粘ったあと、別れの時が訪れた。「佐竹の家に生まれたかった！」と泣きじゃくる声。やがて涙をぬぐい、凛とした顔で、「ありがとう」と告げる姿。直前まで子どもそのものだったのに、去り際だけは未来を知る者のような顔をしていた。私は心の中で、「ずるい」とつぶやいて、それ以上何も言えなかつた。

残された私達は、彼から託されたクエストを協力して終えた。達成のよろこびよりも、静まり返った部屋に漂っていたのは、彼の泣き声の余韻だつた。

だから私は子どもの泣き声が嫌いだ。あの声は過去を呼び戻す鍵のように胸を叩く。苛立ちも、寂しさも、どうしようもない喪失も。けれど同時に、月を指さし「ムーン！」と叫んだ彼の笑顔もまた、泣き声に重なつてよみがえる。

夜空に月が浮かぶたび、私は思う。あの時、雲に隠れて見えなかつた月は、今もどこかで彼を照らしているのだろうか。泣き声と共によみがえるのは、結局は光の記憶なのかもしれない。